安田女子大学紀要　41，155–168　2013.

保育者養成校（短期大学）と付属幼稚園との連携による幼児教育現場での幼児体育Ⅰの実施

――第１報　プログラム実現化までのプロセス――

石山　由美・木村　達志・松永　有三

Infant Physical Education in Early Childhood Education (in Cooperation with the Attached Kindergarten and Early Childhood Education Teacher Training), First Report: The Process of Implementation

Yumi Ishiyama, Tatsushi Kimura and Yuzo Matsunaga

Ⅰ．緒　　言

1.　プログラム実現化までの背景

近年の，科学の進展・情報化・グローバル化による知識基盤社会の到来，少子化・核家族化・高年齢化の進行，そして1990年代以降ますます深刻になる経済不況の中で，乳幼児の子育てを取り巻く環境は急激に変化している。そのような状況の中，「子育て支援」「地域との連携」「幼保の一体化」の推進等保育現場に対する社会的要請はますます多様化している。

大学には，これからの社会を担う人材を育成する「学士課程教育の質保証」が求められ[1)]，大学は自らの教育内容を学生に身につける学習成果という形で明示すること，そして，その達成度を評価するしくみを機能させることが要請されている[2)]。これを受けて本学では，平成21年度から教務委員会での討議や全学的にFDフォーラムを開催するなどしてシラバスの形式と内容を改める準備を進め，平成22年度から各学科の教育課程を踏まえながら，「何を教えるか」から「何ができるようになるか」という学生の視点に立った行動目標をシラバスに新たに設定し，その目標に沿って授業内容・評価等を改善している。本学保育科においても，保育科内FD委員会を中心に本学の理念・目的・教育目標を踏まえながら，学習成果の点検，教育課程の改善，及び，査定の在り方等，「質の保証」について検討を重ねている。

その一環として，平成22年度からは２年間の教育課程の中で学生に学習成果を身につけさせるための学生支援・フォロー体制作りについて取り組んでいる。短期大学にとって２年間という短い期間での保育者養成という教育課程の中で，どのように質の高い教育内容を学生に身につけさせていくかは大きな課題である。

加えて教員養成校には，「実践的指導力」についての資質能力向上が要請されている[3)]。保育・教育実習はそれを身につける大切な場である。本学には，大学付属幼稚園と短期大学付属幼稚園の２園，付属幼稚園がある。本学保育科では１年次６月と10月，２年次５月に付属幼稚園での教育実習を行うことになっている。付属幼稚園実習は学外の保育所・幼稚園実習に向け，実習の基礎・基本をしっかりと学ぶ場として位置づけている。これまで養成校・幼児教育現場それぞれ

の立場から，園長講話，幼稚園実習時の保育科教員の巡回指導，実習後の両現場の教員による会議を行うなどし，連携してきた。

直接子どもたちと触れ合う現場での学びは，大学で学んだことをもとに実践的指導力を身につける貴重な場である。また，このような経験の中で保育者に向けての内発的動機も得ることができる。子どもの具体的な活動を目の前にしての指導の在り方や問題解決への手だてを探っていける体験的な授業の開発は，現在現場で必要とされる「考える力」「判断力」「臨床的な知」を学生に獲得させるための要諦になるのではないかと思う。

2.　総合学園の特徴を生かした教育（人事交流）

平成 24 年度保育科は，総合学園の特徴を生かした学園内人事交流を行った。筆者（石山）は，幼児教育現場での経験を生かし，実践的な側面からの教育，保育・教育実習に関わる業務及び実習指導の補助等に従事する教員として着任した。付属幼稚園との人事交流は初の取り組みであったが，現代社会から要請されている実践的指導力のある幼稚園教諭及び保育士を育成していくための好機と捉えられている。

3.　養成校と幼児教育現場との連携強化

このようにして始まった養成校と幼児教育現場の人事交流であるが，今後の取り組みを探る中で，これまでの FD 委員会での取り組み等と人事交流を勘案して，今回，幼児体育Ⅰの授業を付属幼稚園で実施するプログラムを計画した。これは「実践的指導力」を身につけさせる手立てとして，また，入学後の 6 月に実施される観察実習をより効果的なものにするために，前期の授業の中で学習した内容を幼児教育現場で学生が実践応用するものである。このプログラムを進めるには，養成校と付属幼稚園双方での教育的位置づけや具体的な時間調整等の話し合いが必要であり，その中で養成校と付属幼稚園の両方にとって価値ある教育となるよう計画を進めていった。

Ⅱ．本研究の目的と方法

本研究では，保育者養成校（短期大学）と付属幼稚園との連携によって，効果的な保育者養成を目指す試みの一環として，幼児体育Ⅰにおけるプログラムを立案し，そのプログラム実現化までのプロセスを記録するとともにプログラムの有効性について検討することを目的とした。プログラムの有効性については，特に学生の内発的動機付けや実践力の向上に焦点を当て，幼児体育Ⅰの授業内の様子等の観察，学生に対するアンケート調査，学生が提出する授業ノート，幼稚園教諭に対する聞き取り調査を通じて明らかにした。なお，プログラムの学習効果については，学生に対してアンケート調査を実施し，その詳細については同研究の第 2 報に記した。

1.　調査方法

調査方法は，自記式のアンケート調査，学生が提出する授業ノートおよび付属幼稚園教諭に対する聞き取り調査とした。

2.　調査対象

平成 24 年度安田女子短期大学保育科における「幼児体育Ⅰ」全受講者，148 名。

3.　調査時期

調査１は，「幼児体育Ⅰ」授業内で付属幼稚園での授業実施１週間前に行い，調査２は付属幼稚園での授業終了後に行った（表1）。

表１　調査の時期

調査１：「幼児体育Ⅰ」授業内で付属幼稚園での授業実施１週間前に実施	
時　期	平成 24 年６月４日…A 組，B 組 平成 24 年６月８日…C 組，D 組
調査２：付属幼稚園での授業実施が終了後に実施	
時　期	平成 24 年６月 11 日…A 組，B 組 平成 24 年６月 15 日…C 組，D 組

Ⅲ．プログラムの目標

1.　教育内容に対する内発的動機付け

保育者養成の視点からすると，高校から保育科に入学した学生には，できるだけ早い時期に授業への明確な目的意識を持ち，意欲的に授業に臨むことが求められる。なぜなら，短期大学の限られた２年間の中で，保育者としての基礎技能や基礎知識，専門的技術を身に付けていかなければならないからだ。そのため，幼児体育Ⅰの授業の中では，１年生の４月から保育現場で必要な技術や保育者としての視点などが授業内容に取り入れられている。授業内容が自分の将来の目標につながっていることに学生が気づき，必要感を持って授業に臨むことが，学習意欲の向上につながると考えられる。

学生の視点から考えると，短期大学入学までに職場体験などで幼児と触れ合う機会はあったが，子どもに教える立場としてかかわる経験がないため，「保育者」の専門性について間近で見てみたいという思いがある。また，「保育者になりたい」という目標を持って，保育科に入学している学生がほとんどであるが，実際に「保育者」の仕事がどのようなものであるか，専門的な内容については知識が少ない。

以上のような背景から，幼児体育Ⅰの授業の中で学んだ保育内容や技術を実際に付属幼稚園で実践することによって，授業内容がどのように保育現場で展開されていくか，理論と実践を結び付けて学ぶことができると考えた。また，学生の保育者の将来の希望を明確化することや，授業内容が保育者の専門的知識や技術につながっていることを体感し授業への意欲を高めること，学習意欲が高まることで実践力の向上へとつながることも期待できる。知識や技術の獲得だけでなく，内面的な変化による学習への意欲の原動力となることをこのプログラムの目標とし，計画・実施した。

2.　学生の実践力向上

当該授業は実践的な内容で進められるとはいえ，実際に子どもを指導することはこれまでなかった。人の前に立ち，指導する模擬保育の経験は取り入れているが，学生対象に指導をしてうまくできても，どうしても実際の子どもとは反応が異なる。そのため，実習の際の保育では予想

外のことばかり起こる，自分の思うように子どもが動いてくれないという状況になり，初めて子どもを指導することの難しさや保育者としての視点の必要性に気づく。この気づきが，授業内容が知識としてだけでなく，技術や実践力へと変わっていくために必要なことである。子どもに指導をするという経験が，子どもから保育者として必要な技術や心，姿勢を教えてもらう機会となるのである。

確かに実習は大学での学んだ知識や技術が実践力へと変わる契機となるが，一方で実習は「仕事」として子どもに直接的にかかわることだけでなく掃除や教材準備，保育者としての姿勢，社会人としてのマナーなど総合的に学ぶことになる。学生は何度も実習を重ねる中で，教材研究や指導内容の検討にも取り組むことになるが，実習の初めの段階においては，園生活を知り，慣れること，目の前の様々な仕事に取り組むことで精一杯なのが実情であろう。

そこで，このプログラムでは，「子どもの前で指導する」，「指導中の子どもの様子を観察し，かかわる」，事前学習に加えて指導後に振り替えることで「子どもを理解する」，「教材を理解する」という，実習よりもさらに視点を絞ることをねらい，学びの機会を設定した。つまり，習ったことを実践の場で活かすということをよりピンポイントで経験することができるのである。

3.　観察実習の円滑な実施

本学保育科では，1年生の6月中旬から3日間（もしくは2日間）の観察実習がある。職場体験などで，幼稚園や保育所を訪問したことがある学生は多いが，「仕事」として経験することはもちろん初めてである。6月の最初の実習では，思い描いていた幼稚園での仕事と，現実に実習生として現場で実習をすることにギャップを感じ，また，頭では分かっていても行動できない学生の姿が多くみられる。先述したとおり，園生活や仕事内容を知り，慣れるだけで実習期間は精一杯で，短期大学で学んでいる理論が実践の中でどのようにあるかに気づく視点を持つところに至るのは難しい。

観察実習前に，実際に子どもと触れ合う機会を持つことで，園生活の様子や子どもの様子を知り，具体的な幼稚園生活のイメージや実習への目標を持つことができ，初めての実習でのギャップを小さくすることが期待できる。

Ⅳ．実施までのプロセス

1.　全体計画と大学内での手続き

本学保育科1年生は37名4クラスで構成されており，幼児体育Ⅰはクラスごとで授業を行っている。付属幼稚園で授業を行うにあたって，クラスごとで行っている授業時間の中で，付属幼稚園での授業を実施することとし，計画した（表2）。

内容については付属幼稚園の生活時間と学生の学習内容とを考慮し，付属幼稚園で実施可能な内容を選択した。A組・C組の幼児体操は，園児の好きな遊びの時間の中で行った。B組・D組の鬼遊びは，クラスを2グループに分けて，年中4歳児うめ組ともも組に配属し，設定保育の時間に鬼遊びを行った。また，この授業実施にあたって，付属幼稚園園長に趣旨を説明し，協力を仰いだ。付属幼稚園と日程や対象学年などの調整を行い，平成24年4月23日に大学長宛に起案書を提出した。

2.　付属幼稚園・クラス担任との調整

授業実施において，付属幼稚園との連携を緊密化し，日程や授業内容についてクラス担任との打ち合わせを行った。保育内容に関する打ち合わせは，①授業内容の確認，②クラスの子どもの様子の聞き取り，③授業で行う遊びの子どもの経験の聞き取り，④保育者の思いを聞く，⑤指導案を授業担当者（筆者）が作成し，指導案に基づき保育内容の検討をする，⑥当日の保育の流れと保育者，学生の動きの検討をする，であった。以上の内容について，計3回の打ち合わせを行った。その他，授業担当者が付属幼稚園を4回訪問し，園児の実態把握に努めた。

表2　プログラムの実施計画

日　時	平成24年6月11日（月）　9：00～10：30　　A組
	10：40～12：10　　B組
	平成24年6月15日（金）　9：00～10：30　　C組
	10：40～12：10　　D組
内　容	A組・・・幼児体操（はとぽっぽ体操，あ・い・うー・ぱわわぶ体操）
	B組・・・鬼遊び「おおかみさん」（年中4歳児うめ組）
	鬼遊び「おおかみさん」（年中4歳児もも組）
	C組・・・幼児体操（はとぽっぽ体操，あ・い・うー・ぱわわぶ体操）
	D組・・・鬼遊び「しっぽとりおにごっこ」（年中4歳児うめ組）
	鬼遊び「しっぽとりおにごっこ」（年中4歳児もも組）
対　象	幼児体操・・早バスで登園している3，4，5歳児
	鬼遊び・・・年中4歳児うめ組　男児16名　女児19名
	年中4歳児もも組　男児16名　女児18名

3.　大学内での授業実施

幼児体育の授業は，前期（幼児体育Ⅰ），後期（幼児体育Ⅱ）15回ずつで構成されている。今回，付属幼稚園での授業実施にあたって，授業内容は15回のうちの前半部分の授業内容を反映している。表3は，シラバスの一部抜粋である。シラバスに沿って授業を行い，4週前までに授業内で付属幼稚園での授業実施を伝え，指導案を配布した。

表3　幼児体育Ⅰのシラバス

授業の目標（一般目標） 運動遊びの具体的な内容や指導方法について理解・習得し，保育者としての指導力を身につける。	
到達目標（観点別行動目標） ・運動遊びを指導する上で，安全管理に対する理解とその配慮ができる。 ・子どもたちの前で，幼児体操の指導ができる。 ・子どもたちの前で，鬼遊びの指導ができる。 ・子どもたちの前で，新聞を使った遊びが指導できる。 ・子どもたちの前で，リレー遊びの指導ができる。	授業計画 1）幼児体育Ⅰの理念および授業計画について 2）幼児体操　音楽や映像にあわせて体を動かす 3）幼児体操　せりふや動きを覚える 4）幼児体操　前に出て指導をする 5）鬼遊び　追いかけっこ 6）鬼遊び　役割分担がある遊び ～

4.　授業担当者による指導案の作成

実習では，保育を担当するときは指導案を作成する。今回は，実習ではないが，授業担当者，学生，付属幼稚園教諭と多くの人が保育にかかわるため，皆が共通認識を持って保育できるよう

指導案を作成することとした。指導案について学生はまだ学習していない時期であったため，授業担当者が指導案を作成し，学生に配布した。配布したのち，指導案を基に指導案の見方や保育の中で大切にすること，保育のねらいと保育者の援助のつながりなどが理解できるよう，保育の流れや予想される子どもの姿，援助や指導者の視点について学生に説明をした（表4）。

5.　学生による指導原稿の作成

クラスごとで指導内容に違いはあるが，指導内容に合わせ子どもの前に出て指導する代表学生（以下，指導者とする）を学生間で3～8名決めた。指導案の中の子どもの活動の流れや保育者の援助を，実際の活動の中でどのように具体化していくのかを指導原稿というかたちで学生が作成した。学生は指導原稿を作成する中で，学生同士考えを出し合ったり，授業担当者の添削を受け何度も考え直したりした。

指導原稿は，指導者だけが作成するのではなく，グループ全員で考え，内容を全員が把握し，指導者と同じ視点で保育に参加できるよう配慮した。

6.　事前準備の中での学生の変化

学生の事前準備として，指導原稿の作成だけでなく，「おおかみさん」のお面づくりや「しっぽとり鬼ごっこ」のしっぽ作りなどの教材準備も行った。教材作成は学生が授業で習ったことを基に，自分たちで考えて行った。その過程で，子どもにとって使いやすいか，子どもが喜んで参加できるかなど，子どものことを考えながら作成する姿があった。

また，指導原稿を作成していく過程で，子どもの前で指導することの大変さを感じ，自主的に練習をしたり，疑問に思ったことを授業担当者の所へ質問に来たりするなど学習への姿勢に変化が見られた。

Ⅴ．付属幼稚園での実践

1.　幼児体操

⑴日時

A組は，6月11日㈪9：00～10：30（好きな遊びの時間），園庭にて行い，C組は，6月15日㈮9：00～10：30（好きな遊びの時間），同じく園庭にて行った。

⑵保育のねらいと活動の流れ

1）ねらい

ねらいは，「音楽に合わせて，体操をする楽しさを感じると先生と一緒に，大きく体を動かして体操することを楽しむ。」であった。

2）活動の流れ

表2に活動の流れを記した。

3）学生の感想（アンケートの自由記述より）

子どもの活動については，指導案のように進んでいったが，授業後の学生のアンケートには次のようなものがあった。「緊張していて，台本通りにできなかった」，「興味をもっている子どもたちしか一緒にやってくれず，体操しようと声をかけても，ヤダの一点張り。しかし，音楽をかけたら集まってきてくれて，知っている曲ほど自慢げに，体操をしてくれた。」，「すぐに声がか

けらえると思っていたが，不安や緊張から声が出なく，保育者は本当にすごいと思った」，「思っていた以上に，子どもが集まってきてくれなくて，子どもの興味を引くのはとても大変なことだと思った」などであった。

表４　学生に配布した指導案の一部抜粋

時刻	環境構成と予想される子どもの姿		援助（視点やかかわり）
9：30 9：35 9：40 9：45 9：50 9：55	もも組前テラス 園庭　T 子ども ・体操ができる十分なスペースがあるか確認する。 ・周りに遊具があれば端に寄せるなどし，子どもが踏んだり転んだりしないようにする。	○「はとぽっぽ体操」をする ・学生の見える場所に集まる ・学生と一緒に音楽に合わせて体操をする ・学生の話を聞く ○「あ・い・うー」をする。 ・これからする体操について学生から話を聞く ・学生と一緒に音楽に合わせて体操をする ・学生の話を聞く ○「ぱわわぷ体操」をする。 ・これからする体操について学生から話を聞く ・学生と一緒に音楽に合わせて体操をする ○学生の話を聞く	・子どもの遊びの様子を見ながら，明るい表情で声をかけ，これから始まる体操に興味を持ち，やってみたいと思えるよう誘いかけていく。 ・どこで体操があるか分かるように，誘いかけの声をかけ始めたら体操が始まる場所で子どもたちを笑顔で迎える。 ・子 … 味がも て … ょう 話 … ・体 … が届く 範囲 … 把握す る。 … の様子 を見 … ・全 … 始める こと … ・歌 … 動かし たり … く。 ・子 … ント を使 … く動 い … … ・後 … ている か， … ・走 … 士がぶ つか … ながら リー … ・子 … とりす る姿 … ・体 … れば， 子ど … 楽しめ るよう誘いかけていく。 ・今日の体操について話をし，友達や学生（先生）と一緒に体操をして楽しかったと感じたり，またやってみたいと思ったりできるよう話をする。

学生に配布した指導案の一部抜粋である。

同様に，活動日と活動条件に応じて合計６種類の指導案を作成した。詳細は以下の通りである。

- うめ組との「おおかみさん」
- もも組との「おおかみさん」
- うめ組との「しっぽとり鬼ごっこ」
- もも組との「しっぽとり鬼ごっこ」
- 幼児体操・・・Ａ組，Ｃ組

Ｂ組：うめ組との「おおかみさん」
Ｄ組：もも組との「おおかみさん」，うめ組との「しっぽとり鬼ごっこ」，もも組との「しっぽとり鬼ごっこ」

4）授業担当者の気づき

学生の感想にもあるように，好きな遊びの時間ということもあり，学生の誘いかけで体操に参加した子どもは，こちらが予想していたよりも少なく，30 人ほどだった。どの年齢の子どもにも誘いかけをしたが，参加したのは３歳児が主で，４歳児・５歳児はほんのわずかであった。曜日は違うが，Ａ組・Ｃ組どちらも参加した子どもの状況も，ほぼ同じであった（図 1）。

参加してくれた子どもたちに，笑顔で接することはどの学生も心がけており，子どもが体操を楽しいと感じられるよう努力していた（図 2）。しかし，相手に分かるように伝えることや大きな声を出すこと，全体を見ながら進めていくことは難しかったようだ。また，参加してくれた子どもの人数が少なかったことや自分たちの誘いかけで子どもの気持ちが向かなかったことなど「うまくいかなかった」と感じた学生が多く，園児と過ごすことは楽しかったと感じながらも自分たちの指導への達成感は低かったようだ。

図１　子どもたちを誘いかけている様子

図２　一緒に幼児体操をしている様子

2.　鬼遊び「おおかみさん」

⑴日時

Ｂ組は６月 11 日（月）10：40 ～ 12：10 に行った。クラスを２分し，一方は年中４歳児うめ組を対象に大学体育館で実施した。もう一方は，年中４歳児もも組を対象に幼稚園園庭にで実施した。

⑵保育のねらいと活動の流れ

1）ねらい

ねらいは，「遊び方やルールがわかり，先生や友達と一緒におおかみさんの鬼あそびを楽しむ。」であった。

2）活動の流れ

うめ組，もも組どちらも設定保育の時間に鬼遊び「おおかみさん」を行った。大学の授業時間の関係上，クラスの子どもたちを集め，遊びを行う場所に連れて行くまでの部分は，クラス担任が行った。学生は，すでに子どもがそれぞれの場所で待っている状態から指導を行った。子どもたちは，これから学生と何をして遊ぶのだろうと，期待感をもって待ってくれており，学生は鬼遊びの説明など導入を行いやすかったようだった（図 3）。クラスを半分に分けて，２つのグループが入れ替わりで３回ずつ「おおかみさん」をした。1，２回目は学生がおおかみ役（おに役）をし，３回目は希望する子どもと学生が一緒におおかみ役をした。

3）学生の感想（アンケート自由記述より）

「おおかみさん」を指導した内容については，授業後の学生のアンケートには次のような感想があった。「最初のうちはみんな集中して話を聞いていくれていたけど，途中から少しずつ集中が切れていったように感じた。」，「緊張していて台本通りいかなかった。臨機応変が大事だということが分かった。」，「かなり大きい声で話さないと子どもたちは友達同士で話をしたりしているので指示が通らないことが分かった。あと，意欲付けとか笑顔で返すこととか基本的なこともちゃんと自分たちができていないと，子どもたちも声が小さくなることが分かった。」，「言いたいことがうまく表現できなかった」，「泣く子，（おおかみを）怖がる子など，様々な子どもたちがいて，指導者としてどう対応していいか分からなくなった。」，「自分たちの予想外だった出来事がたくさんあった。」などであった。

4）授業担当者の気づき

自分なりに準備を重ね，ある程度スムーズに活動が展開できることを期待していたが，思うようにならなかったという感想が多かった。学生の感想では，失敗したことが多く取り上げられて

いたが，クラスの活動としては子どもたちがルールを理解し，友達と一緒に「おおかみさん」を楽しんでいた。また，活動中，うめ組・もも組どちらのクラスでも，転んだり鬼にタッチされたりして泣いた子どもが数名いた。学生は，子どもたちと楽しく過ごそうと計画をしてきたのであるから，遊ぶ中で泣くことがあるかもしれないと授業担当者から予想を聞いていても，泣いている子どもを目の当たりにすると戸惑いは大きかったようである（図4）。しかし，「子どもたちに楽しい時間を過ごしてほしい」という思いで，技術は拙いながらもクラス担任の援助を受けながら，何とか子どもたちをまとめ，活動後の子どもたちからは「楽しかった。またしたい。」と言う声が聞かれる活動となった。

図3　一緒に「おおかみさん」をしている様子

図4　泣いてしまった子どもに寄り添って

3.　鬼遊び「しっぽとり鬼ごっこ」

⑴日時

D組は6月15日（金）10：40～12：10に行った。クラスを2分し，一方は年中4歳児うめ組を対象に園庭で実施した。もう一方は，年中4歳児もも組を対象に大学体育館で実施した。

⑵保育のねらいと活動の流れ

1）ねらいは，「遊び方やルールがわかり，先生や友達と一緒にしっぽとり鬼ごっこを楽しむ。」であった。

2）活動の流れ

うめ組，もも組どちらも設定保育の時間に鬼遊び「しっぽとり鬼ごっこ」を行った。しっぽとり鬼ごっこは，当日までに親子遠足で保護者と一緒に遊んだ経験があり，クラスの大半の子どもたちはルールを理解していた。親子遠足以降，子どもたちから遊びたいという声はあったが，好きな遊びの中ではなかなか仲間が集まらず，十分遊べなかった。クラス全員で遊ぶのは，当日が初めてであった。大学の授業内容の関係上，しっぽとり鬼ごっこはクラスを分割し2チームでのチーム戦で行うため，チーム分けをすることとクラスの子どもたちを遊びを行う場所に連れて行くまでの部分は，クラス担任が行った。学生は，すでに子どもがそれぞれの場所で待っている状態から指導を行った。

チーム対抗で3回戦行った。今回は，しっぽを取られてもそのまま遊びに参加することができ，最後までしっぽを取られなかった人が多いチームが勝つ，というルールで行った。

3）学生の感想（アンケート自由記述より）

「しっぽとり鬼ごっこ」を指導した内容については，授業後の学生のアンケートには次のような感想があった。「私は，1回目の指導だったので比較的（子どもが）落ち着いていた。でも，楽しくなかったとか言われたのが不安だった。」，「自分の力のなさが身に染みた。声かけの難し

さ，時間配分などもっと考えなければいけないと思った。」，「自分たちの言葉が子どもたちにどのように伝わるのかが分かった。笑顔でいることがどれだけ大切か分かった。」，「言葉では伝わらないことがたくさんあった。でも子どもは素直に言葉や態度で表現してくれた。」，「前に立つと，考えていたことが飛び，頭が真っ白になった。後ろから見るのとは違って，子どもたちの表情が見え，様子がとらえやすかった。」，「子どもの集中する時間や走るのが好きな子，苦手な子の違いに気づけた。」，「子どもたち全員をまとめることは想像以上に難しかった。たくさんの子どもがいる中で，一人一人の動きをしっかり見て動かなければいけないと分かった。」などであった。

4）授業担当者の気づき

「おおかみさん」と同様に，設定保育の中で行ったが，「おおかみさん」より動く範囲が広くなったこととクラス全員の子どもが一度に動くので，全体を把握できるように自分も子どもと一緒に遊ぶということが難しかったようである（図5）。また，クラス全員に向けて話をする場面が多く，大きな声で子どもに分かるように話をするということを，計画の段階から考えてはいるが，実際にするとなると予想と違う反応を子どもがしたり緊張して声が聞こえにくかったりし，担任教諭にフォローしてしたいただいた場面が何度かあった（図6）。

学生の感想では，失敗したことが多く取り上げられていたが，クラスの活動としては子どもたちがルールを理解して遊び，チームでしっぽり鬼ごっこをする楽しさを感じていたようだった。

図5　園庭でしっぽとり鬼ごっこをしている様子

図6　子どもたちに説明をする様子

4.　付属幼稚園での実践を終えて

幼児体育Ⅰでは，毎回の授業内容を学生自身がノートにまとめ，学期末に提出することになっている。付属幼稚園での授業を終えて，学生が授業ノートの中でまとめた感想から，どのようなことを学んだかを読み取った（表5，6）。

これらの記述から，学生たちが子どもたちを指導し，遊びを進めていくための指導技術や言葉がけ，一人一人への理解など実践的なことを学び，また，自分たちに今後どのような力が必要かを実感したことが感想から分かる。

また，子どもたちを指導するという経験から，保育に必要な技術的なことだけでなく，どのような保育者になりたいかという，保育者としての姿勢につながってくる思いも持ったことがうかがえた。付属幼稚園という幼児教育現場に赴くだけでなく，実際に自分たちで保育を行い，子どもたちと触れ合ったことで，心を動かされ，学びへとつながったことが多かったのではないかと思われた。

表５　学生の感想１

初めて実際の現場でたった30分だが子どもたちと〝おおかみさん〟の遊びをした。授業を活かすことや，前からグループの人たちと話し合っていたことを実行するという目的で頭がいっぱいで他のことに気を遣うことができなかったと思います。幼稚園の現場へ行き，子どもたちの前に立つと，考えていた言葉なんて出てくるわけもなく，たくさんのアドリブで話をしましたが，大切なことが抜けていたり，上手く伝えられなかったりとごちゃごちゃになってしまうところがたくさんあり，先生にたくさん助けられて30分間遊べたと思いました。授業で先生が「自分が100％しても半分も伝わらない」とおっしゃっていた意味がよく分かりました。私たちが説明しているときは，ルールを知っている子どもが多くて，聞いてくれない子がいました。その子どもを注意していると，他の子どもは退屈したり，「早く終わって」と言ったりしました。一人の子だけではなく全員への配慮が必要だから全体に目を向けることがどれだけ大切か分かりました。[1] 遊んでいるときは，子どもたちはちゃんと手をつないでくれたり，おおかみ役の言葉に反応してくれたりして嬉しかったし，私たちも体育でしていたおおかみさんよりしっかり遊べたと思いました。私たちの考えていた範囲を越したのが，子どもたちのぶつかり合いでした。おおかみ役をしている子どもが逃げている子どもを捕まえた後，捕まった子が悔しくて泣いたり，捕まえた後になかなか離さなかったりと様々ありました。自分たちは，自分たちが指導することと子どもたちへの予想していたことが甘かったとつくづく思いました。子どもたちは，〝遊び〟の中に中途半端ということがなくて，常に本気だったり真剣だったり，私たちが考えていないことを考えていたりし，予想することはすごく難しいです。そんな真剣に遊んでいる子ども同士なら，ぶつかり合って喧嘩してしまうのは当然だと思いました。[2]

その喧嘩をすぐに止めるのではなく，お互いの意見を尊重しあう大事なものだと感じました。[3] 私たちは初めて子どもの前で何かをしたとき，すごく緊張したり，お互いが目を合わせてヘルプを出したりしていたが，実際の現場では一人だし，不安な顔をして子どもたちの前に立ってはいけないことも分かりました。[4] 子どもたちと遊ぶ時，子どもの目線になり話をすることは基本となり，話をしているうちに少し離れていた子どもたちも近寄ってきてくれたり，話しかけてくれたり，手を繋いできてくれたりと少しずつ距離が近くなり，もっと子どもたちのことを知りたいと思えるようになりました。[5] 最後のまとめは，上手くまとめられなくて先生に助けてもらいましたが，授業やボランティアでは味わえないことがたくさんあったし，子どもへの関心も持てたし，頑張る気持ちが増えました。[6] 実習も頑張りたいと思います。

表６　学生の感想２

今回のしっぽとりの指導の経験は，私にとって本当に貴重な経験になりました。しかし，振り返ってみると反省点ばかり見えてきます。一番強く思うことは，子どもたちを楽しませることができたのかということです。[7] 正直，私の中では，子どもたちを戸惑わせることも多く，楽しかった！もっとやりたい！と思わせることができなかったと振り返っています。[8] 今回は泣いている子，困っている子，ポカーンとしている姿が見られ，子どもたちの輝いた姿を見ることができませんでした。保育者の卵として，自分の指導力はまだまだ足りません。今回いただいた貴重な時間の中でしたが，上手く指導できず，申し訳ない気持ちで一杯です。今後は反省点を活かし，子どもの輝いた姿を多く見ることができるように自分の指導力を磨き上げたいです。[9] そして，今回の経験から，指導する大変さを身に染みて感じました。現場の先生方は，本当にすごいです。今まで子どもと遊ぶ時は，30人単位ではなく，1人や2，3人と少人数でした。しかし，初めてクラス皆をまとめるという立場を設けていただき，私の課題が多く見えてきました。大きな声，笑顔，視野を広く，シンプルで分かりやすい話し方，子どもの〝声〟を見逃さないこと，意欲付け，興奮を抑える方法など，多くの反省点がありました。[10] しかし，実際に子どもたちとかかわっていく中で，新しい発見が多くあり，子どもから学ぶこともありました。一生懸命に頷きながら話を聞いている子，友達のしっぽを一生懸命に取ろうとしている子，やったーと気持ちを跳ねて思いきり感情表現している子，戸惑って泣く子・・・と子どもたちの生の姿を見ることができました。[11] 特に私の印象に残っていることは，子どもたちは「エイエイオー！」という掛け声がお気に入りだということです。1回目の時，皆で声をそろえて元気いっぱいに言っている姿は輝いていました。さらに3回目のしっぽとりスタートの直前で，ある女の子が「ちょっと待った！」と沈黙を破って「エイエイオーしよう」という提案をしたのです。子ども自身が，周りのみんなの意欲を高められるような提案をする姿に息が止まりました。3回目の「エイエイオー」をしている子どもの姿は，みんなが一つとなって，力強さを感じました。私は，子どもたちのそういう一言一言を大切に受け止めていく保育者になりたいです。[12]

※下線は筆者が作成

5.　クラス担任への聞き取り調査

付属幼稚園での授業を４クラスが全て行った後，授業担当者がうめ組・もも組クラス担任への今回の実践についての聞き取りを行った結果，表７，８のような意見が出た。

表７　授業実施前の取り組みに関する質問と回答

質問１	授業を行うにあたって事前に取り組んだことはありますか？
回答	・しっぽを取ることに慣れるために，保育室で友達と２人組になって，しっぽの取り合いをして遊んだ。 ・親子遠足で，保護者の方と一緒にしっぽとり鬼ごっこをした。 ・親子遠足後，好きな遊びの時間で誘いかけて何回か遊んだが，チーム対抗で遊ぶため，なかなか人数がそろわなかったり時間が取れなかったりして遊びが盛り上がらなかった。 ・「おおかみさん」は，特には取り組んでいないが，年少組が授業を行う前の時期に遊んでいたので，見て知ってはいた。 ・体操に関しては特にない。

表８　授業実施時の子どもの様子に関する質問と回答

質問２	授業を行った時の子どもの様子で，気づいたことはありますか？
回答	⑴ 体操に関して ・体操の時は，担任が十分かかわれなかったのと曜日（月曜日は所持品の片付けに時間がかかる，子どもが落ち着かない）・時間（早バスの子どもしかいなかった）の関係で，参加する子どもが少なかった。時間帯が違えばもっと子どもが参加したのではないだろうか。 ・体操では大人が（学生）多く，圧迫感があった。後から入りたいと思った子どもは参加しにくかったのではないか。 ・体操は，年中や年長はほとんど参加しなかった。「おかあさんといっしょ」の体操は小さい子の体操と思っていた子どもがいた。 ・体操は知らないもの（園で取り組んでいないもの）３つだったので子どもの飛びつきが悪かった。園でやっている体操が１つあると子どもの興味の持ち方が違ったのではないか。 ・月・金曜日という日，時間帯が違えばもっとたくさん子どもが参加したかもしれない。学生さんがせっかく体験に来られたのに，参加する子どもが少なくて，申し訳なかった。 ・体操として新しいものを教えてもらえると，園では（先生の）刺激になる。
	⑵ おおかみさんに関して ・おおかみさんは，喜ばない子どももいた。同時期に，年少組が遊んでいたので，〝小さい子の遊び〟と捉えていたのかもしれない。
	⑶ しっぽとり鬼ごっこに関して ・チーム対抗で行えて楽しかった。内容的にはよかった。 ・事前に好きな遊びの中で取り組んだが，あまり盛り上がらなかった。今回，設定保育の中で遊んだことで，子どもは満足した。 ・逃げる時間が長かった。もう少し，短くてもよいと思ったが，逆に自分が思っているより子どもはたくさん動けるということが分かった。 ・もう少し，鬼ごっこになるように，追いかけてほしかった。 ・学生は，臨機応変に子どもの様子に合わせることは難しい。保育をする中でも，担任と大学教員との連携が必要。

その他に，「今回は自分たちのしたい保育内容と大学の授業内容とが一致していたので取り組むことができた。」，「学生にとって，幼稚園という場に来るだけでも勉強になるのではないかと思う。」という意見もあった。

また，学生の勉強の場としてだけでなく，新しい知識や技術を得たり，刺激となったりする現場の先生の学びの場としての期待もあった。

Ⅴ．考　　察

本研究では，保育者養成校（短期大学）と付属幼稚園との連携によって，効果的な保育者養成を目指す試みの一環として，幼児体育Ⅰにおけるプログラムを立案し，そのプログラム実現化までのプロセスを記録するとともに，プログラムの有効性について検討することを目的とした。

本報告の前半では，このプログラムを実践した背景や経緯を述べるとともに，プログラム実現までの経緯を記述した。これは，このプログラムが本学で初めての試みであり，人事交流を含め今後も継続していくことで成果が上がっていくものと考えているからである。また，このような取り組みは，高橋[6)7)]や加藤[8)]，岩本ら[9)]の先行研究はあるが，あまり多くはみられない。その理由として，本研究も含めたこのようなプログラムは，保育者養成において教育的効果が期待できるが，実際的な問題として，協力園との距離，大学の授業時間と幼児教育現場における保育時間の調整，学生が保育を行う際いかに保育の質を保証していくのか，幼児教育現場や子ども理解なくして保育は成り立たないということなどが考えられる。

本報告の後半では，プログラムの有効性について学生に対するアンケート調査（自由記述），学生が提出する授業ノート，付属幼稚園教諭に対する聞き取り調査から検討した。学生の感想1，2（表5，6）から，次の5点の学生の内面的変化などを読み取ることができた。下線1），8）からは「指導技術の理解」，下線2），11）からは「子どもの姿の理解」，下線5），6），9），10）からは「学習への意欲向上と課題の発見」，下線3），4），7）からは「保育感の芽生え」，下線12）からは「保育者像の獲得」である。これらの5つの特徴的変化は，この度感想を掲載した学生に限らず，概ねどの学生にもこれらの5点の変化の一部または全てを読み取ることができた。

実践をし，失敗をする中で，今後の学習の中で何が必要かを考え自分の目標を持ったり，実際に幼児教育現場へ行き保育者の姿を見たことで「こんな保育者になりたい」と憧れの気持ちを持ったり，また付属幼稚園へ行き習ったことを実践してみたいと意欲を持ったりすることができた。このことは，大きな成果であった。また，授業で得た知識が実践の場でどのように使われるかを経験することで，総合的な学習の場である実習よりも，より明確に理論と実践のつながりを感じることができたのではないだろうか。この経験が，「実践的指導力」へとつながっていくよう，今後の授業の中で生かしていきたい。

学生たちが自分なりにシミュレーションをし，練習を重ね，ある程度はできるだろうと考えて，付属幼稚園へ行った学生が多かったようだったが，自分が思った以上にできなかったり，子どもの反応が良くなかったりしたことに，ショックを受けていた。授業担当者も初めての試みだったので，予想が不十分なところがあった。設定保育は，クラス担任との連携ができていたこともあるが，ほぼ予想したように保育できた。しかし，好きな遊びの中で行った体操は，子どもを体操に誘うことに苦戦し，学生にはハードルが高かった。体操の内容や実施形態など今後検討の余地があると思われた。

最後に，今回のプログラムは付属幼稚園のニーズと大学の授業内容とが一致していたので，実施することが可能となった。しかし，毎年変わる子どもの姿と大学で扱う授業内容など，どのように双方が連携しこのプログラムを実施していくかを考え，継続したプログラムへとしていくこ

とも課題である。

Ⅵ．謝　　辞

本研究を進めるにあたり，協力いただきました安田女子大学付属幼稚園の園児のみなさん，圓光寺美奈子園長，三上留美主任，岩田浩子教諭に心から感謝いたします。ありがとうございました。

Ⅶ．参　考　文　献

1）中央教育審議会答申：学士課程教育の構築について，2008
2）財団法人短期大学基準協会：短期大学評価基準，2010 改定
3）教員養成審議会第一次答申：新たな時代に向けた教員養成の改善方策について，1997
4）中央教育審議会：子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申），2005
5）教員養成審議会答申：教員の資質能力の向上方策について，1987
6）高橋哲郎，冨永　築，中村愛実：幼児教育現場と連携した実践的な保育者養成のプロジェクト（I），精華女子短期大学研究紀要，32，2006，1-14
7）高橋哲郎：幼児教育現場と連携した実践的な保育者養成のプロジェクト（II），精華女子短期大学研究紀要，2008，34，1-10
8）加藤尚裕，長谷川勝久，白瀬浩司：学生の保育実践に必要な技能の習得をめざした体験型学習プログラムの開発 (その 1)「親子触れ合い教室」の活動を事例として，九州女子大学紀要 . 人文・社会科学編，43(1)，2006，35-49
9）岩本廣美，前田喜四雄，比留間みどり他：保育参加による大学授業の改善―附属幼稚園との連携による「幼児と環境 2」の実践を通して―，教育実践総合センター研究紀要，14，2005，157-169

注）本論文では，付属幼稚園を安田女子大学付属幼稚園，幼児教育現場を一般的にいう幼稚園という意味で用いている。

［2012．9．27　受理］